

特別寄稿・説教

私は心が不思議に暖くなるのを感じた¹

ルカによる福音書 19 章 1 節～10 節

鈴木 有郷

「私は心が不思議に暖くなるのを感じた。」これは 1738 年、ジョン・ウェスレーが 34 才の時に記した言葉です。3 年にわたるアメリカでの伝道活動が完全な失敗に終わり、母国イギリスに失意の帰国をしてから 6 ヶ月がたっていました。ロンドンはアルダスゲート街で開かれていたモラヴィアン派の集会に出席し、そこでキリストの福音と新しく出会ったウェスレーの魂の躍動をそれは如実に表しています。その意味で、この言葉はウェスレー信仰のエキスと言って過言ではありません。深い失意の只中で福音の基本に立ち返り、キリストの証し人として人生の舵を取り直した後のウェスレーの信仰とはどのようなものだったのでしょうか。彼の生誕 300 年を契機に、この問いと真剣に向き合ってみようではありませんか。

ウェスレーは 1735 年 10 月から 1737 年の 12 月までの約 3 年間、アメリカはジョージアで開拓民と先住民を対象とした伝道活動に身を粉にして従事しました。信仰を彼らの生活に根づかせようと、野原にテントを張って説教し、家庭礼拝や小グループでの祈りと学びを重視し、信仰共同体の形成に懸命に取り組んだ伝道者ウェスレーのどこに失敗の原因はあったのでしょうか。それは、ひとえに、彼の人格と信仰が人々の信頼を勝ち得るにはあまりにも未熟であったという点に求めることができます。

伝道に一生懸命になればなる程、ウェスレーと人々の間の亀裂は深まって

¹ 本稿は、2003 年 5 月 24 日、ウェスレー生誕 300 年を記念して、日本基督教団・更新伝道会と青山学院大学の共催による「ウェスレー回心記念日礼拝」における説教である。

いくばかりでした。人々はウェスレーの熱意と学識に尊敬の念を持っていたものの、彼の少しばかり傲慢な人柄と独善的信仰に正直なところ辟易していたらしいのです。その一端を示すものとして次のようなエピソードがあります。彼と一度結婚を誓い合いながら結局他の男性と結婚した女性に対して、聖餐式にあずかることを拒絶したという事件です。彼女は教会生活への熱意を少なからず失っていたようですが、それにしてもウェスレーの行為が牧会的配慮に欠けた、独りよがりなものであったことは否めません。

当時のウェスレーを評して、ウェスレー研究家のアルバート・アウトラーは、「良い行為によって神を喜ばせることがアメリカ時代のウェスレーの究極的関心事であった」と結論しています。ジョージアでの伝道は自己の救済のための手段であった、と。その頃のウェスレーが愛と暖かさに欠けた、冷たい印象を与える人物であったことは明らかで、このあたりに彼のアメリカでの伝道が失敗に終わった最大の原因があったと言えるでしょう。

私にはこのウェスレーが、「ルカによる福音書」に登場するザアカイと重なりあって見えます。ローマ帝国の傀儡政権のために税金を取り立てて歩く徴税人とウェスレーを一緒にするのはウェスレーに対して公平を欠くと思われるかもしれません。しかし、私が注目するのは、二人が自己撞着ということにおいて共通していたということなのです。ザアカイは勿論、ウェスレーにとっても、自分以外の他者は本当の意味で存在していなかったという点です。その彼がアルダスゲート街で、ザアカイと同じようにイエスと出会い、そのことによって人生を生き直すことを学んだという点を凝視したいと思います。

この時ウェスレーは、神の前に自分の義を誇るということがいかに神の意に沿わないものであるかを肝に銘じたと思われれます。彼は自分の正しさに絶望したのです。しかし、この罪の認識は絶望を意味するものではありませんでした。何故ならば、罪の認識はウェスレーをして、人間は神の恵みによって義とされるという神の恵みの徹底的先行を心に刻み付ける契機となったからです。ザアカイが経験したように、ウェスレーもまたイエスにそっくりそのまま受け入れられている自分を発見したのです。その意味で、彼の信仰は贖罪の信仰であり、その中心は赦された者の喜びであったと言えます。自己中心の生き方から神中心の生き方へと文字通り回心したのです。「私は心が不思議に

暖かくなるのを感じた」という言葉の後に次の言葉が続く理由がここにあります。「私の罪をキリストは取り去って下さり、罪と死との律法から私を救って下さったという確信が与えられた。」

ウェスレーにとって回心とはこの世における人間の解放を意味しました。キリストの福音は人間解放のメッセージである。この確信によって回心後のウェスレーは突き動かされています。この世における神の摂理の貧しき器となることこそ、キリスト者の使命であると信じて疑いませんでした。贖罪信仰は感情的陶酔ではない。いたずらに孤独に沈潜する宗教的静寂主義でもない。われわれをこの世にあって神の証し人として生かしめる根源的力である。この彼の主張は、いささかなりとも割り引かれてはなりません。

ウェスレーの贖罪信仰は、あくまでも聖化の信仰であり、**holy living**を強調する信仰でした。彼の社会正義への情熱は、イギリスの貧しい炭鉱夫達の伝道へと彼を駆り立てました。その後の彼の活動は同志達の協力もあって、刑務所の改善、病院や学校の設立、アメリカの奴隷解放運動への支援と幅広く発展していったのです。それらはすべて、礼拝、祈り、小グループにおける組織的学びや霊的交わり等に基礎を置く炭火のような信仰によって生み出されたものでした。ここにおいてもウェスレーをイエスに出会って変えられたザアカイに重ね合わせて見ることができます。

ザアカイは立ち上がって主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、誰かから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。」

ウェスレーの信仰は、イエスと出会って変えられた者の喜びの雄叫びでした。神の摂理の貧しき器として生きることを可能にする力でした。救いの家に住む住人であることを自覚させる魂の糧でした。

現在私達はジョン・ウェスレーから何を学ぶべきでしょうか。二つの点に絞ってみたいと思います。一つは聖化なき信仰は聖書の信仰ではないという神学的主張です。ウェスレーの信仰の継承者である私達は、宗教的静寂主義に陥ってはなりません。感情的陶酔に陥ってはなりません。ウェスレーを回心へと導きかれた神によってこの世へと召し出されていることを忘れてはなりません。ウェスレーから学ぶべきもう一つの点、それは信仰の組織的訓練

の必要性でしょう。運動選手が厳しいトレーニングをつみ、音楽家が常に練習に励むように、私達キリスト者もまた信仰の訓練を自らに課さねばなりません。訓練なくして信仰は無効です。礼拝共同体の中で、共に神を讃美し、共に学び、共に祈ることなくして神の恩寵の証し人として生きることはできません。

日本のキリスト教の礎がウェスレーの燃える信仰と実践への情熱を受け継いだ人々によって築かれてきたことは、歴史が示す事実です。ここに青山学院に深く関わる二人の名前を挙げます。ドーラ・S・スクーンメーカーと本多庸一です。スクーンメーカーが生まれ育った19世紀後半のアメリカ、それはあの「アメリカン・ドリーム」という言葉が物質的豊かさへの憧れとしてアメリカ国民の間に浸透していった時代でした。カリフォルニアには一獲千金を夢見る人々が押しかけ、先住民は特定の居住地に閉じ込められ、南北戦争の危機をなんとか乗り切ったアメリカは、成功の論理と虚栄の誘惑の前に腰をかがめていました。中国人移民に対するすさまじいまでの排斥運動が生まれたのもこの頃でした。このような物質中心主義と白人優越主義の嵐の中で、ドーラ・スクーンメーカーは、女に教育など必要ないとする男尊女卑的風潮が著しかった日本で神の摂理の貧しき器として生きようと決心したのです。彼女に漲る使命感は、恩師に宛てた手紙に鮮明です。「喜んでください。私は数人の日本の少女達と、神の恵みの下に、この暗い世界に小さな光を灯す歩みを始めました。」当時の多くのアメリカ人にとって好奇の対象でしかなかった日本の女子教育に携わることで神の恵みを共有しようというたぎるような情熱を、そこに垣間見ることができます。

彼女の志を受け継いだ日本人の一人が、士族出身で日本人初代の青山学院院長本多庸一です。明治のプロテスタント教会の歴史を綴った山路愛山は、『日本教会史論』の中で、本多庸一、明治学院の院長となった井深樞之助、東北学院の院長となった押川方義、そして日本人最初の牧師の一人植村正久の名を挙げて、彼らの共通点を次のように要約しています。「彼らは浮世の栄華に飽くべき希望を有せざりき。」本多自身「浮世の栄華」との訣別を可能にさせた新しい希望の内容を以下の言葉で表現しています。「私達を窒息せしめていた身分的隷属に対し、キリスト教は四海同胞、士族も平民も、およそ

人たる以上、神の前に価値の上下はないことを教えてくれた。」

ドーラ・スクーンメーカーと本多庸一を堅く結び付けた絆、それは彼らがキリストの福音に人間解放のメッセージを発見したという事実です。彼らは、神によって罪から解放された人間の平等と尊厳を経験的眞実として体験したのです。男も女も、士族も平民もない、人間らしい社会を創造する根源的エネルギーが、彼らの中には確かに躍動していました。

忘れてならないのは、スクーンメーカーと本多に脈打っていたウェスレーの信仰の遺産は、名もない普通の人々によって継承されてきたという事実です。私はその事がある機会にあらためて認識することができました。昨年の夏、私はアメリカのワシントン州にあるシアトル市に一週間程滞在しました。30年前、私はそこで牧師をしていました。日系二世の友人達が歓迎会を開いてくれました。皆、日本人差別の激しかった1930年代のアメリカで中・高校時代を過ごした人達です。彼等は何時の間にか想い出話しに耽っていました。

あの頃の日系人排斥は今の人には想像もつかないだろう、と一人が言いました。父親が亡くなった時、葬儀を引き受けてくれる葬儀屋が見つからなかったのです。もう一人が、フットボールの練習ではチームメイトに後ろから蹴飛ばされることが常だったと言いました。一人の女性は、成績がクラスでトップだったお姉さんに優等賞は与えられず、二番で卒業した白人の生徒に与えられたと話しました。本当に辛く、悲しい時代だった、と。

しかしそういうことだけではなかった、と他の一人が言いました。ホームルーム担当のジョンストン先生は、クラスで絶対ジャップという言葉を許さなかった。確かにそうだった、とかつてのフットボール選手が言いました。肩を脱ぎゅうした自分を心配そうに家まで送ってくれた生徒がいた。そうだ、彼の名前はジムだった。優等生を姉に持つ女性が言いました。卒業式の後わざわざ家に来て、私の心の中ではあなたが一番よ、と言って姉にカードを渡してくれた女の子がいた。彼女の名前はナンシーだった。今では悠々自適の暮らしを営んでいる壮年の男女が、涙をポロポロこぼしながら語り合う想い出話しに私もまた胸が熱くなる思いで聞き入っていました。

ミセス・ジョンソンはメソジスト教会の日曜学校でも先生でした。ジムは

メソジスト教会の牧師の息子でした。ナンシーはメソジスト教会のユース・リーダーでした。彼等の言動は信仰に根ざしたエートスがなせる業でありました。だから日系のメソジストたちは考えたのです。こういう人達を育てた信仰が間違いである筈はない、と。彼らはジムやナンシーやミセス・ジョンストンを通してジョン・ウェスレーの信仰を自らのものとしたのです。人間の人間らしさを肯定するすべてのものに対して「然り、然り」と言い、人間の人間らしさを否定するすべてのものに対して「否、否」と言うことのできる、気骨ある、成熟した、勇気あるキリスト者の姿を見出したのです。

私達はスクーンメーカーや本多庸一やジムやナンシーやミセス・ジョンストンに囲まれて生きています。そういう人々が過去に存在した以上、私達もまた彼らのように生きることが許されている！これが私達へのジョン・ウェスレーのメッセージです。確かに私達に与えられた責任と課題は重い。しかしそのような重い責任と課題を与えられているということは、同時に、限らない喜びでもあります。ウェスレーのように、イエス・キリストの証し人として生きる時、私達もまた、ザアカイが聞いたイエスの言葉を聞くことができるに違いありません。「今日救いがこの家を訪れた。」ウェスレーの回心の言葉を自らのものとするに違いありません。「私は心が不思議に暖かくなるのを感じた。」

(青山学院大学教授・米国合同メソジスト教会宣教師)